

3 習熟度別学級の指導法及び指導過程

性格の消極的な生徒には映像による学習が有効であり、積極的な性格の生徒には教師の直接的指導（適性処遇交互作用）が有効である、と報告されています。そのほか、習熟度の低い生徒に基礎的な教材を学習させるには、プログラム学習、モジュール方式の有効性が報告されています。そのほか、完全学習を目指すブルームの影響によるマスタリー・ラーニングによる事例研究がなされています。

しかし、どの方法もオールマイティではないようです。やはり、自校の生徒の習熟度に応じた到達目標の設定、指導方法、指導過程の工夫をしてゆくの望ましい行き方でしょう。到達度別目標設定の一例は図5のとおりです。

習熟度別学級の学習を進めるには、目標分析、教材構造分析、到達目標の設定、指導法、評価などの研究実践が必要です。それを教師個人の力で解決することは、不可能に近いことです。そこで、教授組織が必要になってきます。教師が協力して組織をつくり、互いに知恵を出し合いチームワークよく学習上の課題の解決を図ってゆくわけです。また、一つのクラスに二人以上の教師が協力して行うティーム・ティーチング方式を取り入れてゆくなど、教授組織の分野の推進は、今後の学校教育の実りを約束してくれることでしょう。

指導方法、指導過程の工夫の一例を示せば 図6 のとおりです。

到達目標	基礎・基本 目 標	発展目標(1)	発展目標(2)	発展目標(3)
A 習熟度別学級 (低 位)	■	▶		
B 習熟度別学級 (中 位)	■	■	▶	
C 習熟度別学級 (高 位)	■	■	■	▶

- クラス全員が到達すべき目標
- ▶ クラス全員が到達しなくても可とする目標

図5 習熟度別学級と到達目標設定
(福島県立須賀川女子高等学校研究紀要を参照して作成)